

取り合へずといふ生ビール重ねけり 秀一

ビール醸造会社の永年の宣伝戦略が奏功したのか、今では誰もが口癖のように発する卓上の言葉。これだけでは俳句にならないが、作者の巧みさは、「重ねけり」とまさに言葉を畳み込んだところにある。政治、経済、社会のホット・ 이슈には大きな変化を期待するのであるが、日常の個人的生活では、変化のないことを自ら愛し楽しんでいる。本当の意味で心に余裕のある、ユーモアに富んだ一句。

夏柳卓袱屋の跡のジャズの店 貞勝

卓袱屋(ちゃぶや)とは、港々にあった特殊料飲店のこと。昔日の賑わいを知る者は数少なくなってきたが、その跡地にはビビッドな感覚のジャズの店が建ち、夜毎に若者のみ込んでいる。卓袱屋の頃から川端にあり、大空襲も生き延びてきた柳は、人の世の移ろいを知ってか知らずか、風にその身を任せている。人は選択的にものを忘れられなければ、生きて行くことに耐えられない。

汗を切る眼の先一点整備工 幸

一意専心、自動車整備に没頭している若者の姿が浮かぶ。「眼の先一点」と、敢えて中八としたことによって、整備工の集中度が活写されている。「汗」の季語は、暑さの別の形容としてネガティブに詠まれることが多いが、この句では、好きな仕事に全神経を注いでいる若者を称える言葉として、ポジティブに使われている。「汗」に新しい命を与える一句である。

耳門より四葩の海に溺れけり 貞勝

耳門には、耳の孔の口と、くぐり戸の二つの意味がある。戸を潜り抜けて寺域に入ったら、一面に海のように四葩の群落があり、それに溺れたという鑑賞。あるいは、寺域に近づくにつれて紫陽花の葉擦れの音が微かに伝わり、やがて満目の紫陽花に出会えたという鑑賞。ここでは、聴覚と視覚の両方の感覚で紫陽花の海に耽溺したという、後者の方の鑑賞をとりたい。

黄と黒の空気が動く夏の蝶 佳史

己が翼で空を飛びたいのは、古代ギリシヤからの人間の願い。それをこのか弱い生き物は、いとも簡単に実行している。羽根を飛ばたかせて空気を動かすという原因事実ではなくて、「空気が動いた」という結果事実の指摘によって、蝶の飛翔を表す手法はあるかも知れないが、この句の眼目は、二種類の蝶を取り込んだところである。

友の忌や卓に集めしねぢれ花

与史

亡き友と作者との関係を想像させる句である。おそらくは、ラグビー部員としてグラウンドを駆けずり回り、振花の芝生に寝転んで将来の夢を語り合った仲間なのであろうか。さりげない野の花に眼をとめ、卓上の小瓶に挿して、亡き友と過ごした学生時代の凝縮した日々を追想する作者の姿が、如実に浮かび出てくる。俳句は、自分史としての側面を持っている。

万緑の故郷変らず私に近く

文枝

遠くにある故郷をそれでも「私に近い」と言い切る、この反語的表現によって、作者の望郷の念の強さが窺える。また、「故郷変わらず」のフレーズからは、大きな変容を遂げているかも知れない故郷であっても、自分の胸の中に残る故郷は、あくまでも昔のままの故郷でありたいという、作者の想いがひしひしと伝わって来る。俳句に大事なものは、事物の客観的写生の修練とともに、己が心の内を素直に表白する勇気なのかも知れない。

年古りて恋に恋せりアマリス

幸枝

人が人を想う気持ちは、年齢に関係なく大事なこと。恋の句は、季語の斡旋によって俗に墮することが多いけれども、この句はアマリスに想いを託すことによって、品格のある句として成功している。

音もなく虫の死体へ蟻いそぐ

ヤエ子

蟻には、自然環境における最終掃除人の役目がある。アマゾンの軍隊蟻は生きている虫でも襲うそうであるが、我が国にはそれ程凶暴な蟻はまだいない。他の虫の亡骸があれば、巢穴に伝令が飛び、あっという間に遺骸が黒点に覆われる光景は、日常よく眼にしているところである。この光景をシンプルにしかも伶俐に「蟻いそぐ」と切り取ったのは巧みであり、観察力が鋭い。

一杯の水割り夏の夕明り

溪水

気忙しかった汗だくの一日もようやく終わり、水割りのグラスの中には氷の触れ合う軽き音。昼と夜の切り替えし点にある、ほっとした時間。暖炉の前の水割りも一興であるうが、水割りは矢張り夏の方が似合う。少量ならば、酒は身体と心の疲れを解き放つ妙薬なのです。

会場・桜蔭会館 文責・増田 守

【夏季通信句会のお知らせ】

八月の句会は、年間予定表に記載の通り、開催致しません。通信句会のみとなりますので、同封の投句葉書を使用して、八月十日（必着）までに投句して下さいようお願い致します。

投句先

郵便番号 211-0053

川崎市中原区上小田中六丁目五十二番十八号

増田 守